

高齢者の時間的展望と対人志向性に関する一考察

— 大学生との比較を中心として —

原 田 一 郎

1. 問題と目的

時間的展望の先行研究を概観すると、①動機づけ、特に、達成動機との関連についての研究、②青年期の自我同一性の達成との関連についての研究という、2つの大きな流れがあるといえる。白井（1995）は、これまでの時間的展望の研究は主に青年期を対象としており、青年期に多い未来指向が最も望ましい時間的展望であるという暗黙の前提にたったものが多いことを指摘している。本研究では、時間的展望研究においてはこれまでほとんど目が向けられなかった高齢者の時間的展望の特徴について検討する。また、高齢者の時間的展望に関わりそうな要因として、親和動機である対人志向性と、高齢者の適応の指標である主観的幸福感を取り上げ、時間的展望との関連について検討する。

時間的展望は様々な下位概念に分類される（白井、1994）。本研究では、時間的展望の下位概念のうち、近年青年期を対象に研究が進められている、時間的態度と時間的指向性を取り上げる。なお、時間的態度は過去・現在・未来に対する感情的評価を、時間的指向性は過去・現在・未来のどの時間的側面をもっとも重要視するかという、関心の方向性を指す。

2. 研究 I

【目的】

青年期を対象として作成された従来の時間的展望尺度を用いて、高齢者の時間的展望の測定し、信頼性・妥当性について検討する。また、高齢者の時間的展望と対人志向性・主観的幸福感の関係について検討する。

【方法】

調査対象：N市市内の高齢者が利用する6施設において質問紙を400部配布、郵送で回収した。60歳以上の高齢者234名（男性71名、女性159名、不明4名）を分析の対象とした。平均年齢は74.0歳（標準偏差6.1、年齢範囲62歳～89歳）であった。

調査時期：平成12年10月上旬～12月中旬

質問紙：

- ① 時間的展望体験尺度（白井、1994）…18項目、5段階評価。時間的態度を測定する。
- ② 対人志向性尺度… Hill（1987）の作成した対人志向性尺度（親和動機尺度）を和訳し、「情緒的支持」

と「ポジティブな刺激」の2つの下位尺度各7項目、計14項目を用いた（5段階評価）。

- ③ 老人用SCT…下仲（1975、1976、1980、1999）より、未来・現在・過去に関する3項目など計8項目を用いた。

- ④ 主観的幸福感尺度…古谷野（1990）の作成したLSIKスケールを用いた。「人生全体についての満足感」「心理的安定」「老いについての評価」の3次元、計9項目で構成される（7項目が2段階評価、2項目が3段階評価）。

- ⑤ フェイスシート…基本的属性として年齢・性別・配偶者の有無・職業の有無・健康状態を尋ねた。

- ⑥ Circles Test…Cottle（1976）が開発した技法で、枠の中に未来・現在・過去のイメージを円で書かせることにより、時間的指向性・時間的統合を測定する。

【結果と考察】

時間的展望体験尺度の因子として、未来に対する肯定的な時間的態度と捉えられる「未来の肯定的受容」因子と、現在に対する肯定的な時間的態度と捉えられる「現在の充実感」因子が抽出された。しかし、過去に対する時間的態度は、時間的展望体験尺度では因子として抽出されなかった。「未来の肯定的受容」と「現在の充実感」が有意な正の相関を持ったことから、高齢者の時間的態度は、少なくとも現在と未来については、互いに関連しているといえる。また、本研究のCircles Test実施結果からは、高齢者の時間的指向性を測定することができなかった。そのため、高齢者の時間指向性の測定と特徴の検討については今後の課題となった。高齢者の時間的指向性を測定する尺度としては、投影法であるCircles Testよりも、文章で直接一番大切な時期を尋ねる時間的指向性質問項目（白井、1997）のようなものの方が適当であるかもしれない。

高齢者の時間的態度と対人志向性との関係については、「未来の肯定的受容」と「ポジティブな刺激」、「現在の充実感」と「ポジティブな刺激」、「情緒的支持」に有意な正の相関が見られた。次に、時間的態度と主観的幸福感の関係について検討したところ、「現在の充実感」、「未来の肯定的受容」とLSIKの各下位尺度間全般に、有意な正の相関が見られた。

3. 研究Ⅱ

【目的】

青年期を比較対象として、高齢者の時間的展望の特徴について検討をすすめる。また、老年期と青年期の時間的展望が、対人志向性に及ぼす影響の差異について比較検討する。

【方法】

調査対象：高齢者群については、研究Ⅰと同じデータを使用した。大学生群のデータは、N市市内の国立大学（4年制）の一般教養の3講義において質問紙調査を行い、その場で回収した。回収された質問紙は計225部であった（男性130名、女性94名、不明1名）。平均年齢は19.2歳（標準偏差2.2）であった。学部は理系学部（工・医）118名、文系学部（文・教・経・情文・法）106名、不明1名であり、ほとんどの者が1年生であった。

調査時期（大学生群）：平成12年11月中旬～12月上旬

質問紙（大学生群）：大学生群の質問項目は、尺度については高齢者群と同様のものを使用した。大学生群では、フェースシート項目は除外し、表紙において年齢・性別・大学名・学部・学年を尋ねた。①時間的展望体験尺度②対人志向性尺度（「情緒的支持」、「ポジティブな刺激」）③ Circles Test ④老人用 SCT ⑤主観的幸福感尺度（LSIK）

【結果と考察】

高齢者の時間的態度の特徴を、青年期を比較対象として把握するために、時間的展望体験尺度の各下位尺度とそれらを構成する項目について、世代差・性差の分散分析を行った。なお、分散分析における各下位尺度は、高齢者群を対象として時間的展望体験尺度の因子分析をした結果得られた因子の項目を用いた。その結果、「現在の充実感」を構成する項目全般で高齢者群の方が有意に高く、青年に比べ高齢者の方が現在の状態に満足していることが示唆された。また、「未来に対する肯定的受容」を構成する項目のほとんどで、青年群が有意に高く、高齢者に比べ、青年の方が未来を肯定的に受け取っていることが示唆された。しかし、「未来に対する肯定的受容」を構成する項目のうち、「これから先のことを考えて今から準備していることがある。」という項目では、高齢者群の方が高かった。山口（1996）は、高齢者の未来展望の核となるのは、心身の自立性と死であると述べて、青年期の時間的展望との質的な異なりがあると述べている。本研究で、高齢者が“これから先の準備”と考えていることには、自らの身体的衰えや死が含まれているかもしれない。高齢者の未来に対する時間的態度について検討する際には、青年期と異なる側面を視野に入れることが必要であると考えられよう。

次に、対人志向性尺度について世代差・性差の分散分析を行った結果から、青年に比べ、高齢者の方が、対人関係における「ポジティブな刺激」を求めているということが示唆された。小林・渡辺（1981）は、老年期において生きがい感を強く持っている人は、他者への関心を強く持っており、他者に対して積極的に関わるとしている。現代の高齢者は現在を肯定的に受けとめ、他者と積極的に関わる傾向が青年と比較しても強いかもしれない。また、現在・未来に対する時間的態度と対人志向性との関係について、青年群と高齢者群の差異を明確にするために、パス解析を行った。その結果、高齢者では、「未来の肯定的受容」が、「情緒的支持」を求めることに影響を及ぼさないが、青年では影響を及ぼすことが示された。

4. 総合的考察

これまで、高齢者を対象とした時間的展望の研究はほとんどなされていなかったため、本研究の研究デザインは探索的なものとなった。本研究で得られた知見からは、現代の高齢者たちが、現在や未来を肯定的に捉え、他者との関わりを楽しむや刺激を求める姿勢を持っていることが伺える。下仲（1995）は、「21世紀の高齢者は、これまでのステレオタイプな暗い老人イメージから脱皮し、成人・中年期における社会生活や家族生活上の義務や役割から解放されて、自由な生活を楽しむことができる時代に生きる人々である。」と述べている。本研究で対象とした高齢者たちは、いきいきと現在を生きる、下仲のいうところの、“21世紀の高齢者”なのかもしれない。現代の高齢者が、自由な生活を楽しむことができる立場にあるのであれば、他者との接触を求める姿勢が強いことは、むしろ自然な姿であるように思われる。児玉ら（1995）は、安定した生活も変化のある生活も、ともに中年期が望む、「望ましい老い」の姿であることを取り上げ、これまでの主観的幸福感によっては捉えきれない、日本人に特有の幸福な老いの要素があることを示唆している。本研究においては、現在・未来に対する時間的態度が対人志向性に関係することが示された。「ポジティブな刺激」と「情緒的支持」をそれぞれ“変化”と“安定”を求める対人志向性の側面と捉えると、時間的態度は、対人関係における「変化」も「安定」にも影響を及ぼすと考えられる。時間的態度は、高齢者のアンビバレントな欲求にも関連する、主観的幸福感とは異なる適応の指標と位置づけることができる概念かもしれない。

青年と高齢者の、もっとも大きな差異点の一つとして、これから先の人生の長さや、時間の有限性への気づきが挙げられる。高齢者では残りの時間が少なく、過去に生

きてきた時間の方が長いが、青年は、これから先を見通して、生きていける。社会的な目標に関するこれまでの知見でも、中年期を境にして社会的目標は変化を遂げることが言われている (P. B. Batles & M. M. Batles, 1990)。つまり、中年期までのある時期は、未来が開けている、もしくは時間を無限であると捉えているために、達成的な目標が重要であるが、その後、時間の有限性の気づきにより、現在に関する関心が高まり、対人的・情緒的な目標が重要になる。このことは、対人志向的な目標を中心に捉えると、高齢者にとっては対人的目標が、人生の主体となる重要な目標であるが、青年にとっては、達成的な目標が優先されるため、対人的な目標はあまり重要視されないと考えられる。これまで、青年期の達成目標を中心とした時間的展望研究では、親和動機は副次

的な目標として、時間的展望と関連する変数としては、ほとんど省みられることはなかった。しかし、本研究においては、高齢者だけでなく、青年においても、時間的態度が肯定的である者は、対人関係に対する志向性を高く持つことが示された。時間的態度が対人志向性に影響を及ぼすことは、青年期においても存在しており、それが老年期にかけて継続することを示していると考えられる。さらに、高齢者と青年では、未来・現在に対する時間的態度が対人志向性に及ぼす影響には、異なりが見られた。時間的態度と対人志向性の関わりが生涯を通して変化していくのかもしれない、この点についての検討は今後の課題となった。今後は、時間的態度と対人志向性の関係が、どのように発達的な変化を遂げていくのか、縦断的・系列的な研究が必要であろう。